保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六条上青木遺跡

2016年9月

社会福祉法人 相愛福祉会 高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市六条町地内に所在する 六条上青木遺跡の調査報告を収録した。
- 2 調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。

調査地 : 香川県高松市六条町字上青木 595 番 1、596 番 1、597 番 1、598 番

調査期間:平成28年1月18日~1月20日(試掘調査)

平成 28 年 5 月 12 日~ 5 月 20 日 (発掘調査)

調査面積:約585㎡

- 3 発掘調査及び整理作業については、高松市教育委員会が実施し、補助執行により、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 舩築 紀子、香川 将慶、梶原 慎司、同非常勤嘱託職員 磯崎 福子が担当した。
- 4 発掘調査から報告書作成にかかる費用については、事業者が全額を負担した。
- 5 本報告書の執筆及び編集は、舩築と磯崎が行った。
- 6 本報告書掲載の遺物写真撮影は、西大寺フォトに委託した。
- 7 本書の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」及び高 松市都市計画図2千5百分の1を一部改変して使用した。
- 8 本報告書の標高値は東京湾平均海面 (T.P.) を表し、座標は国土座標第IV系(世界測地系)に 拠った。また方位は座標北を表す。
- 9 検出遺構の縮尺は、1/40・1/80 を基本とし、出土遺物の実測図は、土器は1/4、石器は1/2を原則とした。
- 10 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SD:溝 SK:土坑 SP:柱穴 SX:性格不明遺構

- 11 土壌及び土器観察の色調表現は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務 局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)による。
- 12 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。

目 次

第1表

第2表

	調査の経緯と経過2	
第2章	地理的環境・歴史的環境3	
第3章	調査成果6	
第4章	まとめ	
挿 図		写真図版
第1図	調査位置図 (S=1/5000)2	第1調査区全景(南から)19
第2図	周辺遺跡分布図5	第3調査区全景(北西から) 19
第3図	六条上青木遺跡遺構配置図7	第3調査区全景(南東から) 19
第4図	SX90 平面図 ······8	第2調査区全景(南から)19
第5図	SX25 平・断面図9	第4調査区東側(西から)19
第6図	SD24 平・断面図 10	第5調査区(北から)19
第7図	SD108 平・断面図 ······ 10	第6調査区(北から)20
第8図	SD1・SK2・SD3・SP4・5・SD6・10・100 平・断面図	第7調査区(北東から)20
	11	SX90 (北から)20
第9図	SD40・41・109・104 平・断面図 12	SK11 (西から)20
第 10 図	SK7・9・11 平・断面図 13	出土遺物20
第 11 図	SK21・22・23・35・42・43・102 平・断面図 … 14	
第 12 図	SK103・107 平・断面図 15	
第 13 図	ピット列群平・断面図(1) 16	
第 14 図	ピット列群平・断面図(2) 17	
第 15 図	出土遺物	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

平成27年1月6日に高松市六条町字上青木595番 1ほかに、保育園新築工事が計画され、社会福祉法人 相愛福祉会(以下、事業者)から高松市教育委員会(以 下、市教委)に埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があっ た。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「六条下所遺跡」 の隣接地にあたることから、試掘調査実施の協議を行 い、事業者の協力を得て、試掘調査を平成28年1月 18日~20日の実働3日で実施することとなった。

試掘調査の結果、当該地に遺構及び遺物が確認でき たため、埋蔵文化財包蔵地「六条上青木遺跡」として 新規で登録された。そのため、事業者から平成28年 4月4日付けで提出された文化財保護法第93条第1 項に基づく発掘届出に対し、香川県教育委員会より 発掘調査を行う旨の行政指導があったことから、4月 15日に事業者と市教委との協議の上、発掘調査を実 施することとなった。

第2節 発掘調査の経過(調査日誌抄)

発掘調査は、遺構面まで掘削が到達する建物の建設 箇所、防火水槽、擁壁部分について実施した。平成 28年5月12日に調査区を設定し、5月20日に調査 道具の撤収を終え、現地調査をすべて完了した。調査 5月19日(木)第3調査区 遺構検出・掘削。 期間は実働で9日である。

調査は5月9日に開始予定であったが、雨天によ り延期したため連日の調査となった。

調査日誌抄(平成28年5月12日~5月20日)

5月12日(木)調査区設定。重機搬入。

5月13日(金) 重機掘削開始。遺構検出開始。 撹乱・遺構掘削。

5月14日(土) 重機掘削・撹乱掘削・遺構検出。

第1調查区 平·断面図作成。

第2調查区 遺構検出·掘削。

第1調査区 全景撮影。

5月15日(日) 第2調查区 平·断面図作成。

第2調查区 全景撮影。

第3調查区 遺構検出、掘削。

重機掘削終了。

5月16日(月) 遺構配置図(S=1/100)作成。



第 1 図 調査位置図(S=1/5000)

第3調查区 平面図作成。重機回送。

5月17日(火) 排水ポンプ設置。

第4.6.7調查区 遺構検出・掘削。 平·断面図作成。

第6.7調查区 全景撮影。

5月18日(水) 第5調査区 遺構検出・掘削。

第5調查区 平·断面図作成。

第3調査区 遺構検出・掘削。

第3調查区 平·断面図作成。

第 4.5 調查区 全景撮影。

第3調查区 平·断面図作成。

第3調査区 全景撮影。

5月20日(金) 第3調査区 下層遺構掘削。

第3調査区 平面図作成。

第3調查区 下層遺構完掘状況 撮影。調査終了。

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

沖積平野の形成は塩江町に源を発する香東川による 影響が最も大きい。春日川、新川といった小河川では 扇状地の発達はあまり見られない。小河川には小規模 な自然堤防による微高地が点在している。沖積平野の 形成以前には、比較的起伏に富んだ地形を呈していた が、河川の沖積作用で埋没・平準化、人間の開墾・開 削により平坦化が進んだと見られる。

現在の香東川は寛永年間に治水事業によって改修されたもので、本来の流路は2つに分流しており、その1つは石清尾山塊の東を迂回して広く氾濫していたことが知られている。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ケ池、下池、長池、大池、旧ガラ池を結ぶ流路等が知られる。その周囲には旧中洲や後背湿地が展開していたことが、過去の発掘調査でも確認されている。

六条上青木遺跡は、高松平野のほぼ中央に位置し、 東側は春日川の支流である古川と、西側は香東川の旧 河道に挟まれた比較的大きな微高地の東端に位置す る。南に標高 120 mの由良山、東に古川が流れ、標 高は 13 mで、地形は北東方向にゆるやかに傾斜する。

第2節 歷史的環境

今回の調査地は旧高松空港用地の周辺に位置し、昭和 19年に陸軍林飛行場用地として強制収用された範囲の東端に隣接する。

高松平野では、過去30年における大規模な開発事業(太田第2土地区画整理事業、高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等)に伴う事前調査により、遺跡数

が飛躍的に増大しつつある。さらに空港跡地周辺地域 の開発が促進されてきており、調査成果が蓄積されつ つある。

<旧石器・縄文時代>

旧石器時代の遺跡は、周辺では三谷町に所在する横 内東遺跡でナイフ形石器が出土し、雨山南遺跡で多量 の剝片と共に瀬戸内技法の国府型ナイフ形石器が出土 している。

縄文時代では、木太町に位置する大池で縄文時代草 創期の有舌尖頭器が表採されているが、晩期に至るま で高松平野部での人間活動の痕跡はあまり認められな い。晩期になると、林町に所在する林・坊城遺跡(1993) の自然河道から土器や石器、木製農耕具等が出土して おり、林・坊城遺跡(2004)では刻目突帯文期の柱 穴群が、はじめて居住痕跡として確認できた。

<弥生時代>

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて高松平野の各地で人間活動の痕跡を確認できるようになる。木太町から林町にわたる弘福寺領山田郡田図比定地北地区や林町の浴・長池遺跡 I・IIにおいて水田跡が確認されている。明確な居住に関わる遺構は少ないものの、農耕の定着に加え、平野部での集団活動の痕跡が確認できるようになった。

中期になると平野部の遺跡は浴・長池遺跡や多肥松 林遺跡等に限られ、丘陵地帯に多く遺跡が分布する。

後期では空港跡地遺跡に大規模な集落が形成された。多肥上町の多肥松林遺跡や太田下町の太田下・須川遺跡等で集落を形成したと思われる遺構と遺物が多数確認できる。また高松平野部各所に、土器胎土中に角閃石を多く含む下川津 B 類土器が多く出土するようになる。

後期後半から終末/古墳時代前期にかけて、平野部にさらに多くの集落が営まれた状況が確認されている。上天神町の上天神遺跡や松縄町の天満・宮西遺跡のように外来系土器がまとまって出土した集落もある。

<古墳時代>

前期前半までは弥生時代終末期から継続する集落が展開する。丘陵・山塊地域に多くの古墳が築造されているが、造営母体となった集落については、中間町に所在する中間西井坪遺跡(1996)で埴輪と土製棺の製作関連遺構が確認されている。

空港跡地遺跡周辺では、古墳時代中期から後期の居 されている。 住域の存在が確認されている。

<古代>

古代における高松平野は大きく山田郡と香川郡で構 成されており、一部阿野郡も含まれている。平野のや や南側を東西方向に横断する南海道が設置され、南北 軸が東に約9~11度振れた条里地割が広く施行され た可能性が指摘されている。松縄町の松縄下所遺跡 高松空港(林飛行場)跡地である。 (2001) で条里制施行に関連する可能性のある 7~8 世紀頃の幹線道路状遺構が検出され、太田下・須川遺 場が建設された。大規模な地形改変となり、戦後農地 跡(1995)では自然河川から平安時代の土器と共に 斎串、人形、櫛が出土している。また空港跡地遺跡の 南側には拝師廃寺があった。

<弘福寺領讃岐国山田郡田図>

郡に領有した寺領内の土地利用の様子を詳細に描写し 川インテリジェントパークとして再開発された。 た絵図があり、描写の時期は平安時代後半と推定され る。現存する最古の年紀、天平7年(735)を有する 荘園絵図であり、当時の集落、耕地の様子が分かる だけでなく、寺領の形態を示す資料として平成3年3 月に重要文化財に指定されている。

し、それに伴い山田郡田図の位置比定作業が進められ、 高松市木太町大池南半から南側の一帯と、旧高松空港 の西部から北側の一帯に存在した可能性が高いことが 推測された。

弘福寺(ぐふくじ)は別名川原寺(かわらでら)と も呼ばれ、7世紀末、飛鳥の地に建立された。讃岐国 ほか多くの寺領を持つなど繁栄したが、9世紀以降衰 微し、11世紀には東寺(とうじ)の末寺となった。 東寺長者による弘福寺所領の復興が試みられた際に、 天平7年の原図をもとに本資料が製作されたと考え られている。

<中世・近世>

平安時代末(11世紀後半)、高松平野では遺跡数が 増加し、鎌倉時代以降(13世紀)には多数の集落遺 川畑 聰2001 『松縄下所遺跡』 高松市教育委員会 跡が確認されている。その中には、空港跡地遺跡、東 渡邊 誠2011『空港跡地遺跡』高松市教育委員会 山崎町の東山崎・水田遺跡、春日町の川南・西遺跡、 香西南町の西打遺跡のように区画施設を有する建物群 が展開するものもある。

中世における当地域の武士は香西氏、十河氏、由佐 氏、神内氏が知られると共にこれらの在地武士の居館 跡や詰め城等をはじめとした遺跡や遺構等が多く確認

近世では、天正 16 年に生駒親正によって高松城が 築かれ、のちに松平氏治下による各地の開墾・開発が 進んだ。空港跡地遺跡でも近世の遺構が確認されてい る。

<高松空港>

調査地が隣接する香川インテリジェントパークは旧

戦況の悪化に伴い、住民は突然立退きとなり、飛行 返還されたが元の条里と大きく異なる区割りとして残 ることとなった。昭和23年に三郎池より導水工事が 行われ、東を流れる古川が氾濫するため改修工事を昭 和 27 年に行った。平成元年12月香南町に新空港が 現在の奈良県明日香村にあった弘福寺が讃岐国山田 建設されて空港が供用廃止になり、高松空港跡地は香

【参考文献】

高松市役所内林村史編集委員会 1958『林村史』

高松市教育委員会 1992 『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山 田郡田図調査報告書』

昭和 63 年度以降高松平野部での発掘調査が本格化 高松市教育委員会 1999 『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ 第 2 次弘福寺領 讃岐国山田郡田図調査報告書』

> 香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財センター 香川県土地開発公社 1996『空港跡地遺跡 I 』

香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 香川県土 地開発公社 2002『空港跡地遺跡 V』

香川県埋蔵文化財研究会 1993『林・坊城遺跡』

香川県教育委員会 国土交通省四国地方整備局 日本道路公団 2004

『中森遺跡 林・坊城遺跡Ⅱ 東山崎・水田遺跡Ⅱ』

香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路 公団 1996『中間西井坪遺跡 I』

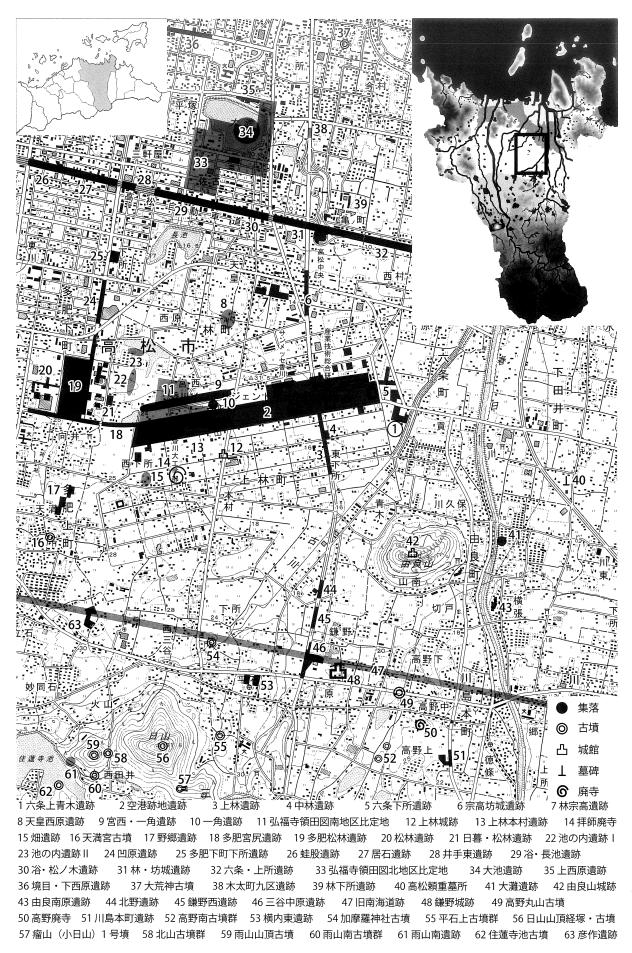
香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 建設省

四国地方建設局 1995『太田下・須川遺跡』

高松市教育委員会 1987 『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』

山本英之 1995 『空港跡地遺跡 (亀の町地区 I)』高松市教育委員会 山本英之 1995 『空港跡地遺跡 (亀の町地区Ⅱ)』 高松市教育委員会 舩築 紀子・磯崎 福子 2016『空港跡地遺跡(亀の町地区 I)第2次

調査』高松市教育委員会



第2図 周辺遺跡分布図

第3章 調查成果

第1節 調査の方法

a.調査区の設定と遺構番号、遺物の取上げ

調査区は重機掘削を行なった順に、第1調査区から 第7調査区とした。遺構には、遺構の種類に関係なく 検出した順番で1から番号を与えた。遺構の種類は、 現地での調査所見をもとに性格を判断し、遺構番号の 上に遺構の略号を冠した。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土土層が明らかな場合は、層位も記載して取上げた。

b. 記録作成

図化作業の際に使用する基準点と水準点は、世界測 地系第IV系・4級基準点を用いた。平面図・断面図と もに手測りで記録を作成した。

第2節 基本層序

調査区の基本層序は、現代耕作土と床土があり、灰白色細砂~シルトの包含層の下に、現地表面下約0.5mで明黄褐色中粒砂まじりシルト~粘土の地山面となる。

第3節 遺構と遺物 古墳時代以前

SX90(第4·15図)

自然の落ち込みと考えられる。第3調査区の中央から北西に延びる。SD40とピット列群に切られる。

最大幅は約 23 m、深さは約 $0.2\sim0.4$ mで、南側ほど深くなる。

遺物は石鏃(S1)が出土している。

SX25(第5・15図)

第3調査区の南西隅から第5調査区を横切る性格 不明遺構である。

埋土は2層に分層でき、上層が黄灰色中粒砂〜細砂まじりシルト、下層が黄灰色〜灰黄褐色シルトに地山ブロックを斑状に含む。

遺物は石鏃(S2)が出土している。

古墳時代

SD24 (第6図)

第5調査区外から第3調査区の南側を東西に蛇行し調査区外へと延びる。SK23に切られる。主軸方位は N-60°-W である。

幅約 $1.0 \sim 0.6$ m、深さ約 $0.15 \sim 0.1$ mを測る。

断面形は逆台形~浅い皿状である。埋土は単層で、中 礫を含む黒褐色中粒砂まじりシルトである。

遺物は土師器片が出土した。

中世以降

SD108 (第7・15図)

第7調査区の中央を南北に直行し撹乱に切られる。 主軸方位は N-10°-E である。

幅約 0.4 m以上、深さ約 0.05 mを測る。断面形は 浅い皿状である。埋土は単層で、灰黄褐色極細砂〜シ ルトである。

遺物は瓦質土器茶釜(1・2)が出土している。1 は口縁部から体部上半部まで残存しており、粘土帯を 積み上げて成型し、口縁部はほぼ直上に伸ばしハケ目 を施している。2は鍔部のみで1と接合しないが同一 個体と思われる。鍔下面に被熱痕がある。出土遺物の 年代から、中世と考えられる。隣接するSP106から も瓦質土器片が出土しており、同時期の可能性がある。 時代不明

SD1 (第8図)

第1調査区の中央を東西に直行し調査区外へと延びる溝状の遺構である。主軸方位は N-80°-W である。

幅約 1.0 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形は不整 形である。埋土は単層で、黄灰色シルトでである。

遺物は出土していない。

SK2 (第8図)

第1調査区の南寄りを斜めに直行し調査区外へと延びる土坑である。主軸方位は N-25°-W である。

幅約 0.9 m、深さ約 0.2 mを測る。断面形は不整形である。埋土は 3 層に分層でき、1 層が灰色シルトでやや粘性がある。2 層が灰オリーブ色シルトでやや粘質、3 層が明黄褐色シルトで粘性がある。

遺物は出土していない。

SD3 (第8図)

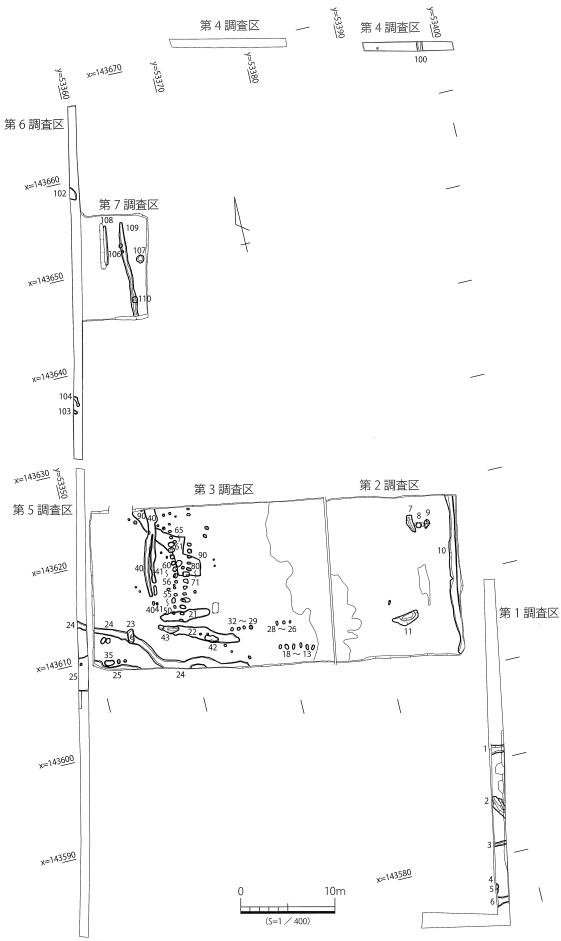
第1調査区の南側を東西に直行し調査区外へと延びる溝状の遺構である。主軸方位はN-90°-Wである。

幅約 0.4 m、深さ約 0.1 mを測る。断面形は椀状である。埋土は単層で、褐灰色シルトである。

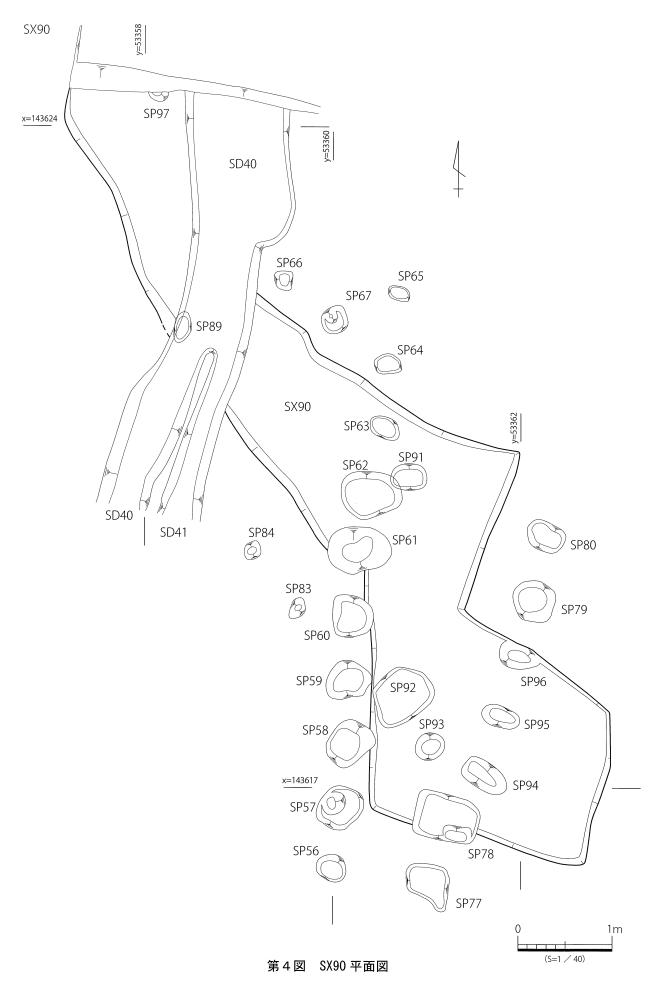
遺物は出土していない。

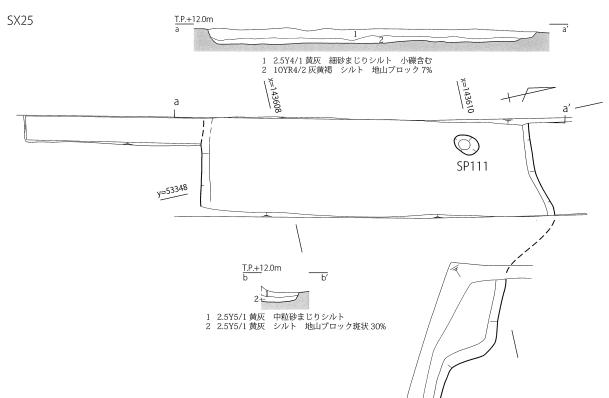
SP4・5・SD6 (第8図)

第1調査区の南側を東西に直行し調査区外へと延びる溝状の遺構とピット状の遺構である。SD6の主軸方位はN-90°-Wである。



第3図 六条上青木遺跡遺構配置図





幅約 $1.2 \, \mathrm{m}$ 、深さ約 $0.1 \, \mathrm{m}$ を測る。断面形は不整形である。 $\mathrm{SP4}$ の埋土は地山ブロック土を含む灰白色シルトである。 $\mathrm{SP5}$ と $\mathrm{SD6}$ の埋土は灰白色シルトである。埋土の状況からこの 3 遺構は同時期並存の可能性がある。

遺物は出土していない。

SD10 (第8図)

第2調査区の東側を南北に直行し調査区外へと延びる。主軸方位は N-10°-E である。SD100 へと続く可能性がある。

幅約 $0.8 \sim 0.5$ m、深さ約 0.15 mを測る。断面形は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、上層がにぶい黄橙色シルト、下層が褐灰色シルトで粘性がある。遺物は出土していない。

SD100 (第8図)

第4調査区の東側を南北に直行し調査区外へと延びる。主軸方位は $N-10^{\circ}$ -E である。SD10 から続く可能性がある。

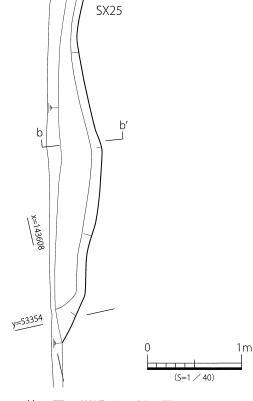
幅約 0.55 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形は浅い皿状である。SD10 との標高差は 0.2m 低い。埋土は単層で、灰黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

SD10、100 は現状の条里方向と一致しており、条里に伴う溝の可能性がある。

SD40·41 (第9図)

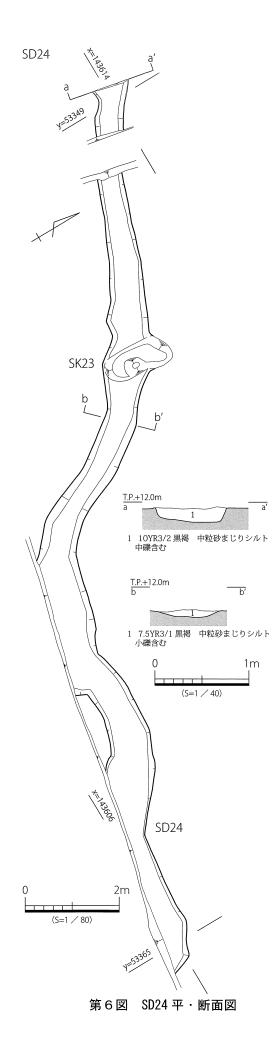
第3調査区の西側を南北にやや蛇行し合流して 褐灰色粗砂まじりシルトである。

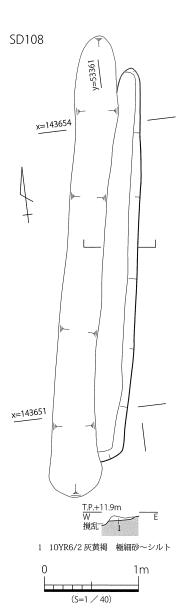


第5図 SX25平·断面図

調査区外へと延びる。主軸方位は N-10 $^{\circ}$ -E である。 SD109 へと続く可能性がある。

幅約0.5 m、深さ約0.04~0.02 mを測る。断面 形は浅い皿状である。SD40の埋土は単層で、黒褐色 粗砂まじりシルトに小礫含む。SD41の埋土は単層で、 褐灰色粗砂まじりシルトである。





第7図 SD108 平·断面図

遺物は出土していない。

SD109 (第9図)

第7調査区の東側を南北に直行し調査区外へと延びる。 $SP105 \cdot 106$ に切られる。主軸方位は $N-0^\circ$ -Wである。SD40 から続く可能性がある。

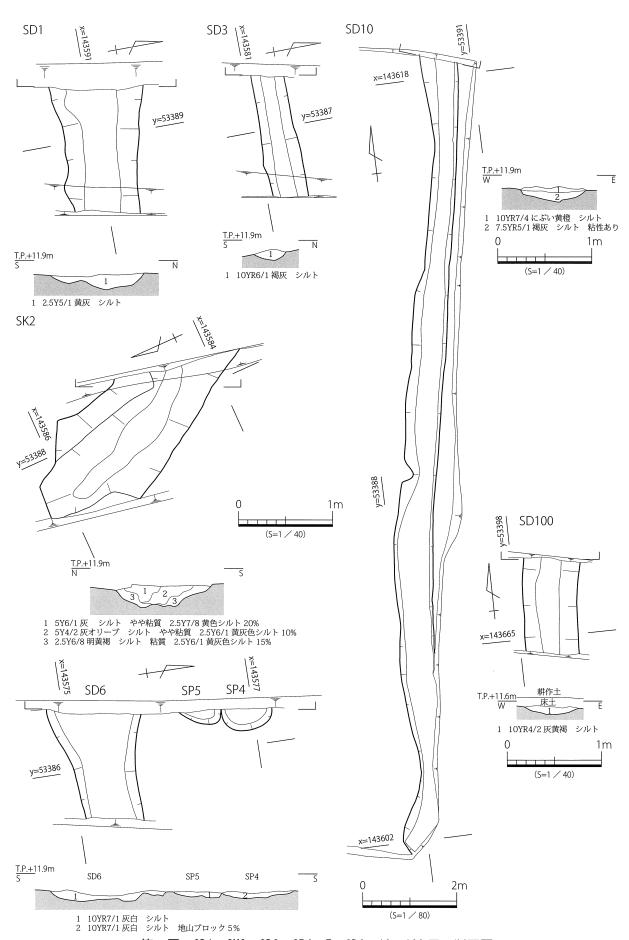
幅約 0.45 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形は浅い皿状である。SD40 との標高差はほとんどない。埋土は単層で、黒褐色極細砂~シルトである。

遺物は出土していない。

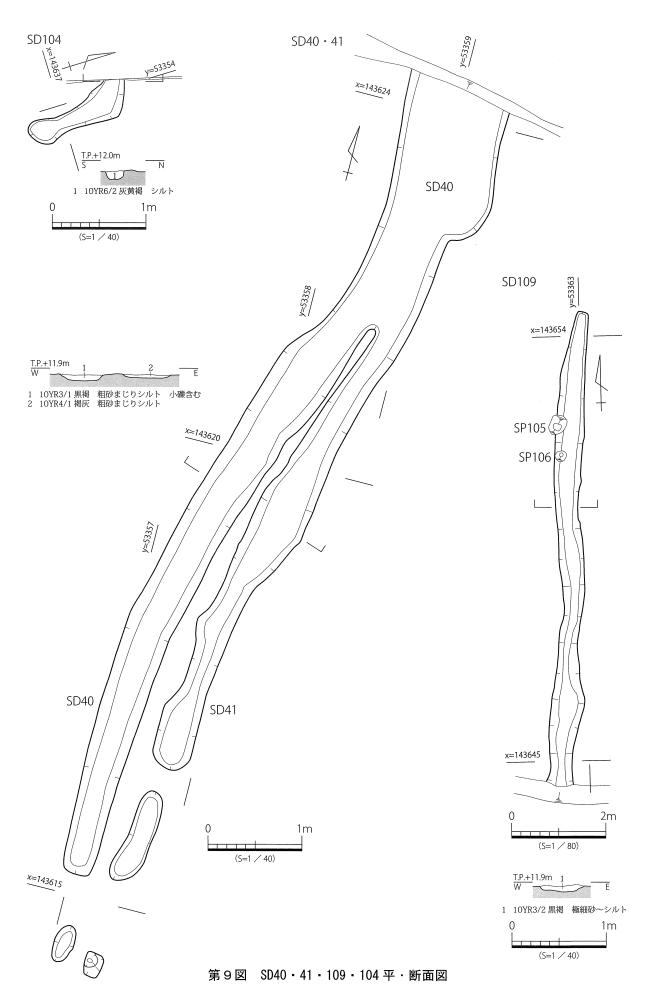
SD104 (第9図)

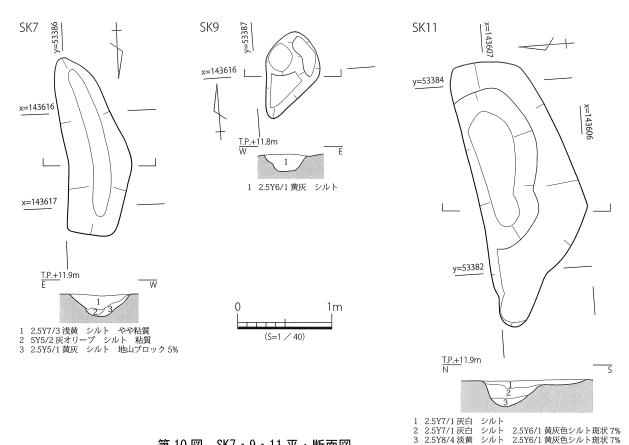
第6調査区の南側を南北から西に屈曲し調査区外へと延びる。主軸方位は N-0°-W から N-70°-W である。

幅約 $0.2~\mathrm{m}$ 、深さ約 $0.1~\mathrm{m}$ を測る。断面形は U 字形である。埋土は単層で、灰黄褐色シルトである。



第8図 SD1・SK2・SD3・SP4・5・SD6・10・100平・断面図





第 10 図 SK7・9・11 平・断面図

遺物は出土していない。

SK7 (第 10 図)

第2調査区の北側で検出した土坑で、平面形状は やや三日月形を呈する。主軸方位は N-10°-W である。

最大長約 1.9m、最大幅約 0.6 m、深さ約 0.2 mを 測る。断面形は V 字形である。埋土は 3 層に分層で き、上層が浅黄色シルトでやや粘質があり、2層が灰 オリーブ色シルトで粘質がある。3層が地山ブロック 土を含む黄灰色シルトである。

遺物は出土していない。

SK9 (第 10 図)

第2調査区の北側で検出した土坑で、平面形状は 水滴形を呈する。主軸方位は N-25°-E である。

最大長約 0.95m、最大幅約 0.6 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形は逆台形である。埋土は単層で、黄灰 色シルトである。

遺物は出土していない。

SK11 (第 10 図)

第2調査区の南側で検出した土坑で、平面形状は 不整長方形を呈する。主軸方位は N-75°-E である。

最大長約 2.8m、最大幅約 1.1 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形は椀状で南側は浅くなる。埋土は3層 に分層でき、上層が灰白色シルト、中層が灰白色シル

トに黄灰色シルトを斑状に含む。下層が淡黄色シルト に黄灰色シルトを斑状に含む。

遺物は出土していない。

SK21 (第 11 図)

第3調査区の南寄りで検出した土坑で、平面形状 は棒状を呈する。主軸方位は N-85°-W である。

最大長約 5.3m、最大幅約 1.0 m、深さ約 0.05 m を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、褐 灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK22(第 11 図)

第3調査区の南側で検出した土坑で、平面形状は 棒状を呈する。主軸方位は N-70°-W である。

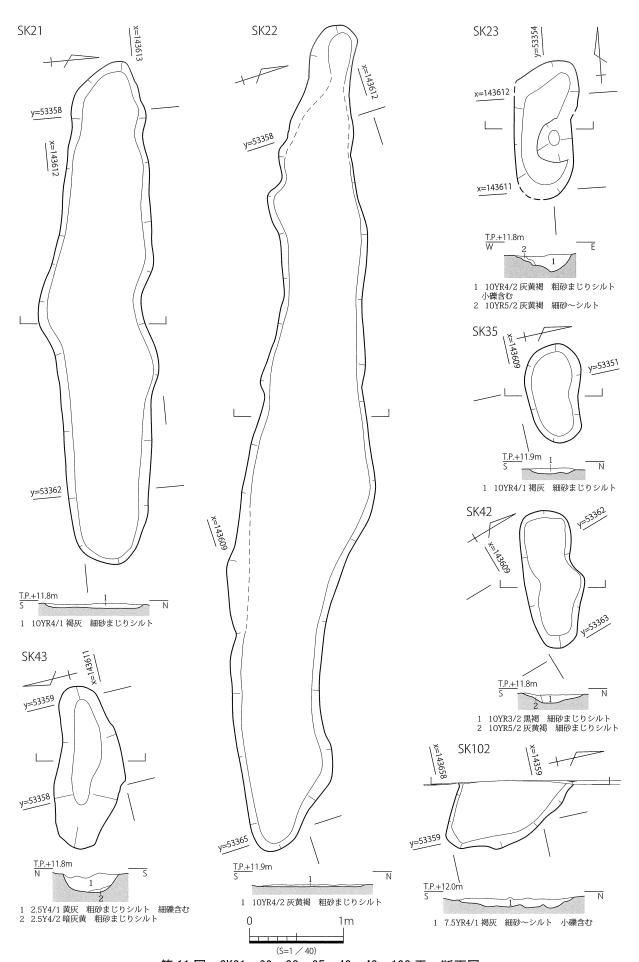
最大長約8.8m、最大幅約1.4m、深さ約0.02m を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、灰 黄褐色粗砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

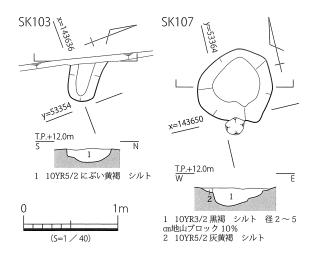
SK23 (第 11 図)

第3調査区の南西側で検出した土坑で SD24 を切 る。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位は N-25° -E である。

最大長約 1.5m、最大幅約 0.6 m、深さ約 0.2 mを 測る。断面形は不整形である。埋土は2層に分層でき、



第 11 図 SK21 · 22 · 23 · 35 · 42 · 43 · 102 平 · 断面図



第 12 図 SK103 - 107 平 - 断面図

1層が灰黄褐色粗砂まじりシルトに小礫含む。2層が 灰黄褐色細砂~シルトである。

遺物は出土していない。

SK35(第 11 図)

は楕円形を呈する。主軸方位は N-80°-W である。

最大長約 1.05m、最大幅約 0.5 m、深さ約 0.05 m 2 層が灰黄褐色シルトである。 を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、褐 灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK42 (第 11 図)

第3調査区の南側で SK22 の掘削後に検出した土 坑で、平面形状は不整長方形を呈する。主軸方位は N-65°-W である。

最大長約 1.5m、最大幅約 0.6 m、深さ約 0.1 mを 測る。断面形は浅い皿状である。埋土は2層に分層で き、1層が黒褐色細砂まじりシルト、2層が灰黄褐色 細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK43 (第 11 図)

坑で、平面形状は楕円形を呈する。主軸方位は N-75° -W である。

測る。断面形は椀状である。埋土は2層に分層でき、 1層が黄灰色粗砂まじりシルトに細礫含む。2層が暗 灰黄色粗砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

SK102(第 11 図)

第6調査区の北側で検出した土坑で調査区外に延 -Wである。 びる。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位は N-60°

-Wである。

最大長約 1.0m、最大幅約 0.7 m以上、深さ約 0.1 mを測る。断面形は不整形である。埋土は単層で、褐 灰色細砂~シルトに小礫含む。

遺物は出土していない。

SK103(第 12 図)

第6調査区の南側で検出した土坑で調査区外に延 びる。平面形状は長方形を呈する。主軸方位は N-55° -W である。

最大長約 0.45m、最大幅約 0.4 m以上、深さ約 0.15 mを測る。断面形は椀状である。埋土は単層でにぶい 黄褐色シルトである。

遺物は出土していない。

SK107 (第 12 図)

第7調査区の東側で検出した土坑で、平面形状は 円形を呈する。

最大長約 0.8m、深さ約 0.2 mを測る。断面形は逆 第3調査区の南西隅で検出した土坑で、平面形状 台形に縁辺は浅くなる。埋土は2層に分層でき、1層 が黒褐色シルトに径2~5cm地山ブロック土を含む。

遺物は出土していない。

ピット列群(第13・14図)

第3調査区でほぼ一定間隔で連続するピット群を、 東西方向に3列、南北方向に4列検出した。溝の残 滓か農作業の痕跡か不明である。

A列群とB列群は西に約2.5 m離れて同一方向に連 続し、B列群とC列群は約2.5 m離れてほぼ平行する。 さらに西に約2.5 m離れてSK22 の掘削後からも同様 なピット2基を検出した。

D 列群とE 列群、F 列群は方向を変えながらも連続 すると思われる。F列群とG列群は約1m離れてほ ぼ平行し、D列群とG列群は約2m離れる。

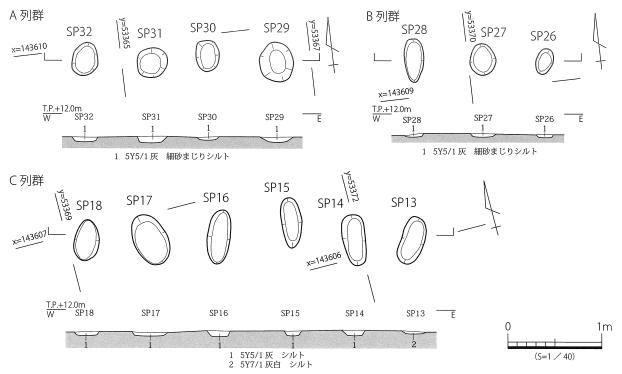
A列群は第3調査区の南側を東西に連続して検出し 第 3 調査区の南側で SK22 の掘削後に検出した土 た。芯芯間距離は約 0.7 mを測る。主軸方位は N-80° -W である。

ピットの規模は長さ約 0.6 ~ 0.45m、幅約 0.35 ~ 最大長約 1.7m、最大幅約 0.7 m、深さ約 0.2 mを 0.2 m、深さ約 0.06 ~ 0.02 mを測る。断面形は浅い 皿状である。埋土は単層で、灰色細砂まじりシルトで ある。

遺物は出土していない。

B列群は第3調査区の南東を東西に連続して検出し た。芯芯間距離は約0.7 mを測る。主軸方位はN-80°

ピットの規模は長さ約 $0.45 \sim 0.3$ m、幅約 $0.3 \sim 0.2$



第13図 ピット列群平・断面図(1)

m、深さ約 0.04 ~ 0.03 mを測る。断面形は浅い皿 した。SP50 は SK21 の掘削後に検出した。芯芯間距 状である。埋土は単層で灰色細砂まじりシルトである。 遺物は出土していない。

C列群は第3調査区の南東を東西に連続して検出し た。芯芯間距離は約0.7 mを測る。主軸方位はN-75° -W である。

ピットの規模は長さ約0.6~0.4m、幅約0.35~0.2 m、深さ約 0.06 ~ 0.03 mを測る。断面形は浅い皿 状である。埋土は灰色シルトである。

遺物は出土していない。

D列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出 した。芯芯間距離は約0.75~0.7 mを測る。主軸方 位は N-10°-E である。

ピットの規模は長さ約0.7~0.25m、幅約0.5~ 0.15 m、深さ約 0.1 ~ 0.02 mを測る。断面形は浅い 皿状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

E列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出 した。芯芯間距離は約 0.7 ~ 0.65 mを測る。主軸方 位は N-5°-E である。

ピットの規模は長さ約 $0.5 \sim 0.3$ m、幅約 $0.4 \sim 0.3$ m、深さ約0.08~0.04 mを測る。断面形は浅い皿 状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

F列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出

離は約0.7~0.3 mを測る。主軸方位はN-15°-Eで ある。

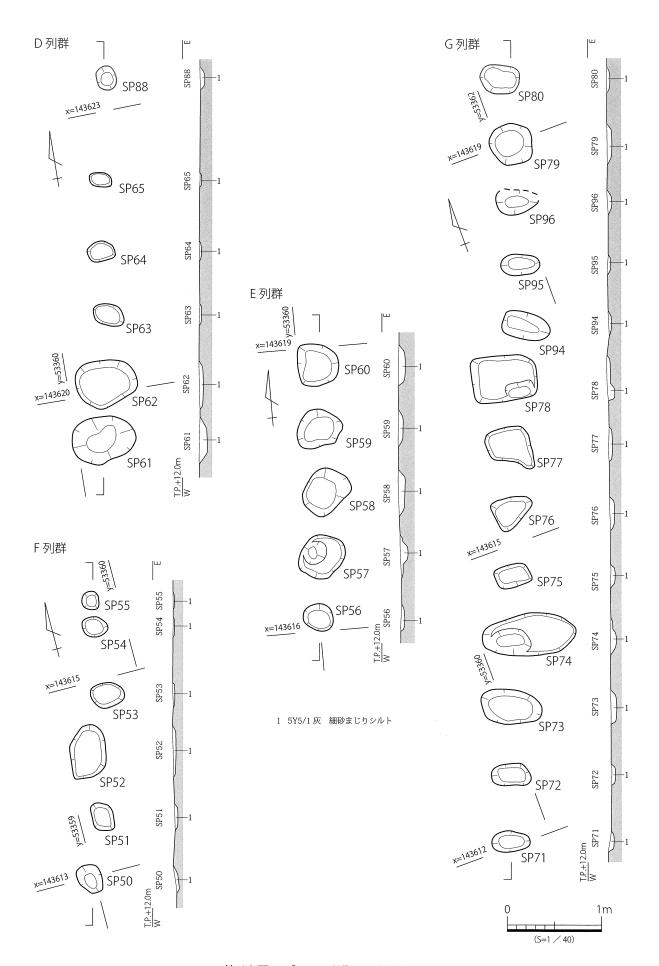
ピットの規模は長さ約 $0.6 \sim 0.2$ m、幅約 $0.4 \sim 0.2$ m、深さ約 0.04 ~ 0.02 mを測る。断面形は浅い皿 状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。

G列群は第3調査区の西寄りを南北に連続して検出 した。SP71・72はSK21の掘削後にSP94~SP96 は SX90 の掘削後に検出した。 芯芯間距離は約 0.7 ~ 0.6 mを測る。主軸方位は N-20°-E である。

ピットの規模は長さ約 $1.0 \sim 0.4$ m、幅約 $0.5 \sim 0.2$ m、深さ約 0.07 ~ 0.03 mを測る。断面形は浅い皿 状である。埋土は灰色細砂まじりシルトである。

遺物は出土していない。



第14図 ピット列群平・断面図(2)

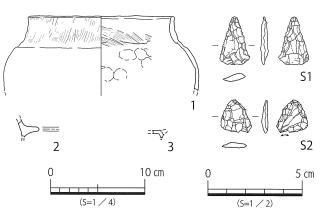
第4章 まとめ

第1節 遺跡と遺構

調査地は、南西から北東へとゆるやかに傾斜する 地形に立地し、遺構面も現在の地形と同様に概ね南 西側が高く、北東側が低い地形を呈する。床土直下 で遺構が検出されたことから、耕作等によって遺構 が削られた可能性がある。遺構の埋土は、灰白色の ものと、黒灰色のものとが認められ、灰白色のもの が中世、黒灰色のものが弥生時代~中世までの遺構 と考えられるが、遺物の出土量が少量であるため、 詳細な時期決定はできない。当調査地は空港跡地遺 跡の東端に隣接し、確認した遺構の時期も空港跡地 遺跡東端部と同様の様相をしている。

確認した遺構の、現在の条里に沿うSD 1・3・6・10・100・40・41・109・108とピット列群は、条里施行後の農耕関連遺構と考えられる。対してSD24は条里に沿わないことから条里施行前の遺構と考えられる。

以上の遺構の状況からも、当該地が集落域ではなく、生産域であったことを示すものである。



第 15 図 出土遺物

第2節 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ整理箱約1 箱分と非常に少ない。中世と推定される茶釜、土師器 片、石鏃、試掘調査で出土した須恵器片などである。

【参考文献】

香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 香川県土 地開発公社 1998『空港跡地遺跡Ⅲ』

第	1	表	土	吞首	貺多	兴才	支

報文 番号 遺構・層位名		種類	器種	種 (部位)	法量(cm)		調整		色調		胎土		焼成	残存 率	備考	
番号	退併 僧似石	作里为只	石户个里	(1001)	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		/ // // // // // // // // // // // // /		率	1佣与
1	SD108(鋤溝)	瓦質土器	茶釜		(15. 6)	_	[7. 9]	tデ、 ルケ目 後tデ	ハケ目後 ナデ・、 指オサエ 後ナデ・	N4/0 灰 色	10Y6/1 灰色	普	0.1~3 mm程度 の石英・長石・ 赤色粒含む	良	反転 復元	内面頸部・ 体部;接 合痕
2	SD108(鋤溝)	瓦質土器	茶釜			_	[1.8]	横方向ナデ	横方向	N6/0 灰 色	10Y6/1 灰色	普	0.1~3 mm程度 の石英・長石・ 赤色粒含む	良	断片	外面下部; 被熱痕
3	灰白色包含層	土師質土器	杯?	高台部		_	[0. 9]	ナテ゛	マメツ	10YR8/6 黄橙色	10YR8/6 黄橙色	普	0.1~1 mm程度 の長石・白色粒 含む	良	断片	

第2表 石器観察表

報文番号	遺構 / 層位名	種類	機種	法量 (cm)			7-++	壬县 ()	(井土	
番号	息件/管证石			最大長	最大幅	最大厚	石材	重量(g)	備考	
S1	SX90	打製石器	石鏃 (平基式)	2. 5	1.6	0. 45	サヌカイト	1.2	風化著しい、自色風化	
S2	SX25	打製石器	石鏃 (平基式)	1.8	1.65	3. 5	サヌカイト	0.8		



第2調査区全景(南から)

第1調査区全景(南から)





第3調査区全景(南東から)





第5調査区(北から)



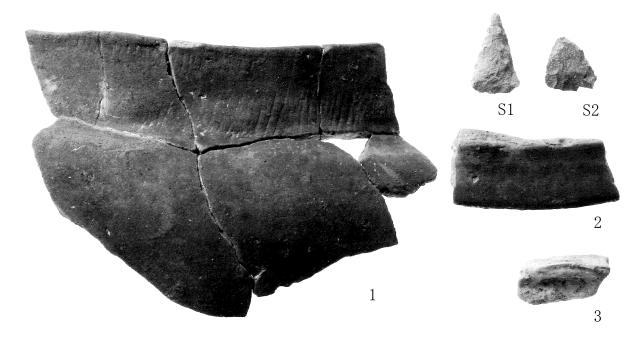




SK11 (西から)



SX90 (北から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ろくじょうかみあおきいせき											
書名	六条上青木遺跡											
副書名	保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書											
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告											
シリーズ番号	第 174 集											
編著者名	舩築 紀子、磯崎 福子											
編集機関	高松市教育委員会											
所在地	〒 760-8571 香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号 🖫 .087(839)2660											
発行年月日	平成 28	年9月3	30 日									
ふりがな	所在地		ード		北緯	東紹	ζ.	調査期間	調杏	而積	調査原因	
所収遺跡名	/// 11.26	市町村	遺跡者	野	コロル年	水 小	C.	140日140日	調査面積		M.E./八凸	
うくじょうかみあおき 六条上青木 いせき 遺跡	高松市六条町	37201			34° 17'36"	134° 04	1'47"	H28.1.18 ~ 1.20 H28.5.12 ~ 5.20	約 585㎡		保育園新築工事	
所収遺跡名	種別	主な問	寺代		主な遺構			主な遺物		特記事項		
ろくじょうかみあおき 六条上青木 いせき 遺跡	生産域	溝 鍬湋	i込み ‡ 土坑、ピット	土器、石器、 器、須恵器、 土器								
概要	空港跡地遺跡の縁辺部と考えられる。出土遺物が極めて少ないが、条里に沿う遺構は条里施行 後の農耕関連遺構の可能性がある。											

高松市埋蔵文化財調査報告第 174 集

保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六条上青木遺跡

平成 28 年 9 月 30 日 発行

発 行 社会福祉法人 相愛福祉会

高松市六条町 604 番地 7

編 集/発 行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

印刷 有限会社 中央ファイリング